

# 源氏の藤壺事件における意識の再検討

——若菜下巻「思ひやりなき」を起点として——

岸 ひとみ

【要旨】藤壺と密通した光源氏が、女三の宮に柏木と密通されるという展開から、従来は、密通事件そのものを〈応報〉という観点で、源氏の意識を捉え直すというアプローチがなされてきた。本稿においては、源氏が密通の事実を知った後に、柏木

る自己の「罪」の大きさと重さの気づきは不十分であることがわかった。柏木の密通事件は〈応報〉という以上に源氏の認識の甘さを浮き彫りにするものだったと考えられる。

に対して発した「いと思ひやりなきこそいと罪ゆるしがたけれ」の「思ひやりなき」という言葉に注目して、源氏の過去の密通における「思ひやり」を逆照射することによって、源氏の藤壺事件における意識を再検討した。

【キーワード】源氏物語、思ひやりなき、罪ゆるしがたけれ

はじめに

すると、「思ひやり」の有無を判断するに際して、加害者と被害者の関係性において、被害者が「裏切り」と意識することが「思ひやりなき」になるといふ加害者目線の「思ひやりなき」であることが判明した。そこから、源氏の藤壺事件におけ

る藤壺と密通した光源氏が、女三の宮に柏木と密通されるという展開は、『源氏物語』の密通の中でも、密通の罪を犯した加害者が被害者となるという二面性を持つものとなっている。先行研究を確認すると、清水好子氏は「過去の栄華の源泉であっ

た不義について、彼一人の胸に被害者のものとしても加害者のものとしても、はっきりとその意味を掴める」とされ、重松信弘氏は「この密通事件には応報の思想と共に、或いはそれ以上に、源氏の生涯の物語を展開さす上に、重要な意味がある。それは、「内面的にはこの物語の人生観・世界観を進展さすという意味」とされ、今西祐一郎氏は「教化としての因果応報ではなく、精神の劇としての因果応報」と指摘し、長谷川政春氏は二つの密通について「応報のモチーフがあると読むよりも、光源氏に己れの犯した「罪」の大きさと重さを気づかせる点に意味があった」と論じられている。<sup>④</sup>

このように従来の研究史においては、二つの密通事件において密通行為そのものから〈応報〉という観点で源氏の意識を捉え直すというアプローチがなされてきた。しかし、源氏が密通の事実を知った後に、初めて柏木に直面して発する心内文では「ただ事のさまの、誰も誰も、いと思ひやりなきこそいと罪ゆるしがたけれ」（新編全集若菜下巻274頁）となっており、「罪ゆるしがたけれ」にかかっているのは「誰も誰も、いと思ひやりなきこそ」で、「事のさま」である柏木と女三の宮の密通という行為そのものが対象ではなく、両者の「いと思ひやりなき」

ことが対象になっている。このことから、密通行為よりもむしろ「思ひやりなき」という語句に、源氏の藤壺事件における意識を捉え直す鍵があるとみるべきではないだろうか。

「思ひやりなき」という語句は、字義的には相手の立場や身の上を考えず思慮なく軽率であるという意味で、相対性を有する主観的なものと言える。そこで、密通における「思ひやり」に関わる源氏の意識を柏木の「思ひやりなき」からの投影によって捉え直すことから糸口を見出してみたい。

### 一、柏木の「思ひやりなき」をめぐる源氏の意識

まず、源氏の柏木に対する「思ひやりなき」に関する意識をみるに際して、源氏が「思ひやりなき」と評したのは次の用例のみである。

①かの中納言の手に似たる手して書きたるかとまで思しよれど、言葉づかひきらきらと紛ふべくもあらぬことどもあり年を経て思ひわたりけることの、たまさかに本意かなひて心やすからぬ筋を書き尽くしたる言葉、いと見どころありてあはれなれど、いとかくさやかには書くべしや、あたら人の、文をこそ思ひやりなく書きけれ、落ち散ることもこ

そと思ひしかば、昔、かやうにこまかなるべきをりふしにも、言そぎつつこそ書き紛らはししか、人の深き用意は難きわざなりけり、とかの人の心をさへ見おとしたまひつ。

(若菜下巻253頁)

「思ひやりなく」は「文」を「書く」ことにかかつている。これは柏木が女三の宮に宛てた手紙で、なぜそれが「思ひやりなく」であるかという点、「いとかくさやかに書くべしや」と、「落ち散ることもこそ」の二つが理由となっている。

前者について、「さやか」とは、主として筆跡から「さやか」である。手紙を源氏が見つけたときには、

男の手なり。紙の香などいと艶に、ことさらめきたる書きざまなり。二重ねにこまこまと書きたるを見たまふに、紛るべき方なくその人の手なりけり

(若菜下巻250頁)

と、筆跡から一目で「その人」つまり柏木ではないかと見抜いている。しかし、まさかと思う気持ちもあり、文面を何度もみるとそこに「言葉づかひきらきら」と、「たまさかに本意かなひて、心やすからぬ筋を書き尽くしたる言葉」があり、柏木と女三の宮の密通の事実が決定的となる。

後者の「落ち散ることもこそ」は、「あないはけな、かかる

物を散らしたまひて、我ならぬ人も見つけたらましかば、と思すも」(若菜下巻250頁)に呼応しており、源氏の邸で既述のとおり筆跡だけでなく内容からも、柏木からとはつきりとわかる手紙を自分以外のものが見つけて、口さがない女房達が大騒ぎでもして噂になれば、朱雀院や帝の耳に入るところとなり、自分に非難が集中することを恐れている。特に朱雀院は女三の宮を、思案のあげく源氏に後見を頼み、源氏が責任を持つて女三の宮を引き受けた。それにもかかわらず、このようなことが露見すれば、朱雀院を悲しませ信用を無くし、どれだけ非難されるであろう。これは帝も源氏を推薦した東宮も同様である。それだけでなく、源氏の權威は失墜し周りから笑われ者となるであろう。それこそ源氏が最も恐れることである。そんなこともわからない柏木の手紙は、准太上天皇たる源氏の立場や身分も考えず、思慮なく軽率な「思ひやりなき」ものとなる。

一方、源氏は柏木に対しては、今までは「何ざまのことにも、ゆゑあるべきをりふしには、かならずことさらにまつはし」(若菜下巻272頁)と、柏木を評価し可愛がっており、「思ひやり」があった。

源氏が柏木を「思ひやりなき」と評した用例①に続くのが次

の用例②で、柏木を評する表現として「おほけなき」という語句が使用されている。今西祐一郎氏が「おほけなき」という語句について「身分不相応」といった解釈では捉え難い、親密な間柄における寵愛・信頼といったものへの裏切り」と指摘されているように<sup>⑤</sup>、この言葉においても両者の関係性が包含されている。

②なほざりのすさびと、はじめより心をとどめぬ人だに、また異ざまの心分くらむと思ふは心づきなく思ひ隔てらるるを、まして、これは、さま異に、おほけなき人の心にもありけるかな、帝の御妻をも過つたぐひ、昔もありけれど、それは、また、いふ方異なり、宮仕といひて、我も人も同じ君に馴れ仕うまつるほどに、おのづからさるべき方につけても心をかはしそめ、ものの紛れ多かりぬべきわざなり、

(若菜下巻254頁)

思はずなることもあれど、おぼろけの定かなる過ち見えぬほどは、さてもまじらふやうもあらむに、ふとしもあらはならぬ紛れありぬべし、かくばかりまたなきさまにもてなしきこえて、内々の心ざし引く方よりも、いつくしくかたじけなきものに思ひはぐくまむ人をおきて、かかることは

さらにたぐひあらじ、と爪はじきせられたまふ。(同頁)  
源氏は女三の宮の懐妊もこの密通の結果とあらためて思い、「なほざりのすさび」でもこのようなことが起こると「心づきなく思ひ隔てらるる」のに、今回のことは「さま異に」と、それとは異なり「おほけなき人の心」と思う。

なぜ「おほけなき」であるかという点、これに続く「帝の御妻をも過つたぐひ、昔もありけれど」と、過去の例をあげてそれと比較して理由を述べている。(i)「宮仕といひて」から「ものの紛れ多かりぬべきわざなり」、(ii)「思はずなることもあれど」から「ふとしもあらはならぬ紛れありぬべし」、(iii)「かくばかりまたなきさまに」から「かたじけなきものに思ひはぐくまむ」の三つが理由となっている。(i)は、妃との密通でもそれなりの事情があつて過ちを犯すことはあろう。しかし柏木は女三の宮と日常的に顔を合わせるような関係ではなく、通常接点はないはずである。(ii)は、男女間において思いがけぬ過ちを犯すことはあろうが、よほどの不始末が露見しない間はすぐには発覚しないであろうものを、今回は「さやかに」書いた手紙をすぐに源氏に見つけられている。(iii)は、既述の「さま異に」の具体的な内容を指しているが、愛情は女三の

宮よりも紫の上の方が強いにもかかわらず、その気持ちを押し  
て紫の上よりも女三の宮を正妻として重々しく立派に大切にし  
ているということである。

これらの点から源氏の意識は、手紙発覚時には「思ひやりな  
き」の対象が「文を書く」ことであつたが、この段階では密通  
に至る事情に思いを寄せ、情状酌量の余地があるかどうかとい  
うことに意識が移っている。さらに密通の発覚について、「お  
ほろけの定かなる過ち」ということから、手紙以外にも密通発  
覚となるような行動に対する「思ひやりなし」がクローズアッ  
プされている。このように意識において点から面へと広がりが生  
じている。

ここにおいて源氏は柏木に対する関係性において、「思ひや  
り」という尺度によつて自分は「思ひやり」があるのに、柏木  
は自分に対してないことを認識した。源氏と関係性がない者よ  
りも「思ひやり」を持っている者からの「思ひやりなき」行為  
は、信頼関係の破壊、裏切りであり、怒り、精神的打撃はその  
分より大きくなる。

以上により、源氏の意識する「思ひやり」には、相手との信  
頼関係・親密度の要素が関わつていると言えよう。

## 二、自分の「思ひやり」に対する源氏の意識

前章で考察した柏木の「思ひやりなき」という語句は源氏視  
点であるので、源氏が意識する「思ひやり」とは具体的にどう  
いうことか本章で考察したい。まず手紙に關しては、源氏は自  
分の若いころはこのような文を書く時には、万一人の目に触れ  
るようなことがあつたらということまで考えて、「昔、かやう  
にこまかなるべきをりふしにも、言そぎつつこそ書き紛らはし  
しか」（前出）と、自ら評している。この「言そぎつつこそ書  
き紛らはししか」というのは、言いたいことをそのまま書くの  
ではなく、その気持ちを押えて内容を簡略にして抽象化しては  
かして書いたということである。

源氏が若いころに關係をもつた女性は多くある。そこで、人  
から非難されるような許されない關係ゆえに最も慎重に事を進  
めなければならぬ女性である藤壺と朧月夜に限定して見てい  
きたい。

まず、藤壺の場合は、源氏から藤壺への文そのものについて  
の記載はない。文を渡すには必ず仲介者がいるのであるが、帝  
の妃との密通は法律上の罪に当たるので仲介者も相当慎重に

行つたはずである。王命婦が仲介者であるが、「御文なども、例の、御覧じ入れぬよしのみあれば」（若紫巻32頁）とあるように受け取つてすらもらえなかつた。

しかし、和歌の贈答が次のとおり二例ある。まず、朱雀院の行幸に先立つて催された試楽で、源氏が帝と藤壺の前で青海波の舞を披露した翌朝に源氏から藤壺に贈答された和歌である。

「いかに御覧じけむ。世に知らぬ乱り心地ながらこそ。

もの思ふに立ち舞ふべくもあらぬ身の袖うちふりし心

知りきや

あなかしこ」とある

（紅葉賀巻313頁）

ここで「世に知らぬ乱り心地」や「もの思ふに立ち舞ふべくもあらぬ」の歌から、許されぬ恋の思いに心乱れていることがうかがわれる。ゆえに、これは「さやか」でないとは言えない。

もう一つの用例は、帝が源氏にそっくりな不義の子を見て可愛がる様子を源氏が見た後のものである。

常夏のはなやかに咲き出でたるを折らせたまひて、命婦の君のもとに書きたまふこと多かるべし。

「よそへつつ見るに心は慰まで露けさまさるなでしこ  
の花

花に咲かなんと思ひたまへしも、かひなき世にはべりければ」とあり。さりぬべき隙にやありけむ、御覧せさせて、

（紅葉賀巻330頁）

ここでは、手紙の内容は明らかにされていないが、多く書かれただろうと語り手から評され、それに添えた歌である。「かひなき世」とあるのは藤壺と源氏のこと、密通を暗示させるものと言えよう。筆跡に関しては書かれていないが、わからないようにするのであれば手紙は簡略にすべきであるがそうではない。手紙に添えればより密通発覚のリスクが増すものである。従つて、これも「さやか」でないと言ひ切れない。

次に朧月夜の場合は、「この畳紙は右大将の御手なり」（賢木巻147頁）とはっきりと源氏とわかる筆跡であることから、密会が父大臣に見つかつてしまう。大胆にも朧月夜の実家の右大臣邸に忍び込んで密会するのであるからさらなる慎重さが必要であるゆえ、源氏自らの手紙ではなく畳紙だとしても筆跡を変えらるべきである。

そして須磨流謫の前に源氏は密かに朧月夜に手紙を出し、その際には「道のほども危ければ、こまかには聞こえたまはず」（須磨巻178頁）として、弘徽殿に万一見られても問題がないよ

うに慎重に行っている。

以上により、源氏の手紙やそれに準じるものがいつも用心深くして、慎重に事を運んでいるとは必ずしも言えないことが明らかになった。過去に朧月夜の畳紙の件で大変なことになるからこそ、須磨流謫の前に出した朧月夜への手紙が慎重になったと言えよう。

次に密通に関わる行動の観点から「思ひやりなき」を検討する。藤壺が里下がりの際には「かかるをりだにと心もあくがれまどひて」（若紫巻230頁）、「暮るれば王命婦を責め歩きたまふ」（若紫巻231頁）源氏である。さらに続いて「いかがたばかりけむ、いとわりなくて見たてまつるほどさへ」（同頁）と、自分の思いを押しきれない行動となっている。そして「殿におはして、泣き寝に臥し暮らしたまひつ。御文なども、例の、御覧じ入れぬよしのみあれば、常のことながらも」（若紫巻232頁）と、藤壺に対して見てもらえぬ手紙を頻繁に出している。さらに「いみじうつつみたまへど、忍びがたき気色の漏り出づるをりをり」（若紫巻235頁）と、管絃を通じて藤壺との心の交流があり、隠し切れないこともある。一時的なアバンチュールであれば理性も働くであろうが、これほどまでに慕う相手に対しては

「思ひやりなき」状態になってしまっている。

以上の点から、許されぬ関係においては手紙だけでなく、すべての行動において「思ひやり」が必要であるにもかかわらず、源氏はそうではなかった。藤壺は帝の妃であり、この密通は法的にも重い罪になるもので、罪の重さは柏木どころではない。柏木を非難する自分自身「思ひやりなき」過去があったのだ。

そうなると源氏は自分の過去を正確には分析できていないことになる。しかし自分はわからないようにしたと認識した上で、「人の深き用意は難きわざなりけり」とし、「かの人の心をさへ見おとし」と柏木を軽蔑している。ここに源氏の自己認識の誤りによる論理の矛盾がみられる。本来なら自分自身の若いころ「思ひやり」があつてこそ、柏木の「思ひやりなき」を非難し、「罪ゆるしがたけれ」とすることは論理が一貫しているが、自分自身が「思ひやりなき」であれば、柏木の「思ひやりなき」を非難する資格はなく「罪ゆるしがたけれ」ということは自家撞着に陥っていることになる。

そこで源氏は、主観的には「思ひやり」があつたと認識していることから、この論理の矛盾を解く鍵として、源氏の意識する「思ひやり」を次のように解きたい。

源氏は「落ち散る」おそれがない場合、または「落ち散る」ことがあっても問題が生じない場合は、「さやかに」書いてもよく、「落ち散る」ことがあって問題が生じる可能性がある場合には、「さやかに」書くことはせず、「思ひやり」があったと意識したとすれば、矛盾は生じないことになる。つまり、問題が生じるかどうか、言いかえると信頼関係が維持されたかどうか「思ひやり」の有無を判断する基準となる。この点について確認するために次章で源氏の過去の密通に関わる意識を見ていきたい。

### 三、藤壺との密通に関わる源氏の意識

源氏の過去の密通に関わる意識について描かれているのは、次の用例である。

- ③ 気色に出だすべきことにもあらずなど思し乱るるにつけて、故院の上も、かく、御心には知ろしめしてや、知らず顔を つくらせたまひけむ、思へば、その世のことこそは、いと恐ろしくあるまじき過ちなりけれ、と近き例を思すにぞ、恋の山路はえもどくまじき御心まじりける。

(若菜下巻25頁)

既述の「昔もありけれど」と対比して、「近き例」の自分自身と藤壺の密通を想起する場面である。ここで初めて柏木の密通の罪の被害者である自分が加害者でもあることに意識が向かっている。「気色に出だすべきことにもあらずなど思し乱るにつけても」と、心が乱れている。しかし、「故院の上も、かく、御心には知ろしめしてや、知らず顔を つくらせたまひけむ」と思うと、故桐壺院がどのような気持ちでそうしたのかを思っただけのこと、それによってどのようなこととなったかを改めて想起し、加害者としての自分の内面に向かう。

そして「その世のことこそは、いと恐ろしくあるまじき過ちなりけれ」と当時の自分を振り返り、隠し通そうとした自分の過去を想起している。密通そのものは柏木と比較して自分は父の寵愛する后が相手であり、父は自分を大変可愛がつくれた、その父と源氏の関係と源氏と柏木の関係は、裏切りという点では源氏の方が大きいはずである。それにもかかわらず故桐壺院が知らぬふりをしたとすればと考え、父の心の大きさと自分の心の有様を比較して悶々としている。

藤壺との密通を想起した源氏の意識を掘り下げるために、「その世のことこそは、いと恐ろしくあるまじき過ちなりけれ」

について見ていきたい。「過ち」として「罪」ではないので、この文を見る限り源氏には罪の意識はないようにも見える。この点について、岡野道夫氏が「罪」、「過ち」、「咎」について分類の上、「分類といつてもいはば便宜的なものであり、内容的には複雑にからみ合っている」とされている<sup>6)</sup>。確かに同じ語句でも、その前後に接続する語句によって、またそれらが同じでも前後の文脈によって意味が異なる場合がある。

そこで、ここに至る文章を見ていくと「帝の御妻をも過つ」、「定かなる過ち」という表現があり、これらの「過ち」は軽い意味の「過ち」ではなく、重い意味の「罪」と区別されていないようである。この「恐ろし」は密通が生じた当時にも出て来る語句であるので、その意味を確認することにより、源氏の意識を探りたい。

藤壺と密会した後は「いかなるにかと御心動かせたまふべかめるも、恐ろしうのみおぼえたまふ」（若紫巻22頁）と帝に対して恐れおののいている。しかし藤壺の懐妊を知った際には自分の子を懐妊したのではないと思ひ、「いとどしくいみじき言の葉尽くし聞こえたまへど、命婦も思ふに、いとむくつけうわづらはしさまさりて、さらにたはかるべき方なし」（若紫巻24頁）

と、帝への恐れよりも、源氏に会うことを拒否している藤壺に会いたい気持ちで勝っている。さらに帝は「源氏の君もいとまなく召しまつはしつづ、御琴笛などさまさまに仕うまつらせたまふ。いみじうつみたまへど、忍びがたき気色の漏り出づるをりをり」（同頁）と、源氏は隠し通せない様子が出るのである。

また皇子が誕生した後に帝が源氏にそっくりだとして可愛がる様子を見て、「中将の君、面の色かはる心地して、恐ろしうも、かたじけなくも、うれしくも、あはれにも、かたがたうつろふ心地して、涙落ちぬべし」（紅葉賀巻32頁）と帝を恐れる気持ちだけではなく様々な感情が渦巻き、「わが身ながらこれに似たらむは、いみじういたはしうおぼえたまふぞあながちなるや」（同頁）と、自分を思う源氏に対して、語り手から身勝手すぎると評されている。帝が何の疑念も持たず喜ぶ姿を見れば、通常であれば罪の意識に怯えるはずであるにもかかわらず、このように思うとはあまりに自己中心的な思考であろう。帝に對する裏切りの意識が強ければこのような帝の言葉に對して、もしかすると密通に気付いているのではないかという意識を持つてもおかしくはない。それにもかかわらずこのように思う

ということ、帝への裏切りの意識は持つてはいるが、深刻なものではなく、表面上だけを見て知られていないことに安堵したのであろう。そうであるからこそ既述のような感情となり、このように語り手から評される。

帝が崩御された後も藤壺の冷淡な態度とは裏腹に「いかなるをりにかありけん、あさましうて近づき参りたまへり。心深くたばかりたまひけんことを知る人なかりければ、夢のやうにぞありける」(賢木巻107頁)と、一周忌も迎えないうちから単独で前よりも極秘に周到な計画をたてて藤壺と密会する。源氏の行動は「いと恐ろしくあるまじき過ちなりけれ」とは裏腹の行動に出ている。

この二例の「恐ろし」はいずれも父帝の源氏への愛情が表れている場面である。それほどまでに自分のことを思ってくれるゆえにこそ生じた意識で、「恐ろし」とは、父に対する裏切りへの恐れと解したい。この点について藤田加代氏が、「王権を犯し父を裏切る藤壺への恋が、構想上源氏栄達の骨子をなすが、一方それは、処断されて破滅する恐怖に身をすくませる主人公の心情」と解されている。父への裏切りと王権侵犯は犯されるものの質が異なり、王権侵犯は大罪であるが、源氏がさらに藤

壺に会おうとしていること、また既述した紅葉賀巻の源氏の意識からは王権を犯す意識は希薄であらう。

以上の点から、密通を犯した当時どれだけ本当に「いと恐ろしくあるまじき過ちなりけれ」と思っていたのか疑問である。確かに「恐ろし」という意識は持つていたが、ひたすら恐れるというのではなく、それと相反する気持ちや行動がある。用例を見る限りにおいては「罪」や「過ち」の語句は見られず、「罪」という意識はなく「恐ろし」という感覚のみである。

そこでこの「恐ろし」が「罪」と隣接して使用されている次の二例を取り上げ、どのような罪の意識を持つていたのか見ていきたい。

④わが罪のほど恐ろしう、あぢきなきことに心をしめて、生けるかぎりこれを思ひなやむべきなめり、(若紫巻21頁)

これは源氏が加持祈祷を受けるために北山の聖のもとに伺った際、僧都から世の無常などの法話を聞いたときの心内文である、この「わが罪」は藤壺との密通と解したい。

さらに自分の若いころを振り返って評した次の用例に注目したい。

⑤恐ろしう罪深き方は多うまさりけめど、いにしへのすきは、

思ひやり少なきほどの過ちに仏神もゆるしたまひけん、と  
思ひさますも、  
(薄雲巻46頁)

源氏は齋宮の女御を訪れて春秋優越論をかわし、女御に対する恋情を訴える。つれなくされて帰るが、その際に自省した心内文である。この思いと藤壺との密通を比較して、藤壺の場合はそれよりも罪が深いと思うが、仏神も大目に見てくれると思っている。ここに藤壺との関係について「恐ろしい罪深き」と「思ひやり少なきほどの過ち」と、同じことについて「罪」と「過ち」と異なる表現が使用されている。これについて、吉村研一氏は、「仏神もゆるしたまひけん」というのは、「源氏の願望であり、その裏には罪の意識に苛まれている源氏の心がむしろ浮き彫りにされている」と述べられているが、「いにしへのすきは、思ひやり少なきほどの過ち」から、むしろこの時点では犯した罪の重大性への認識に甘さがあったのであり、ここに源氏の深い反省の意識は少ない。「思ひやりなき」ではなく「思ひやり少なきほどの過ち」ということから思ひやりの少なさは自覚して、「恐ろしい罪深き」でも自分は許されると思っている。この時点では藤壺も亡くなり不義の子は帝となり、今まで世間に密通を隠し通すことができ、自分は従一位となっ

て栄華を極め、六条院の構想も練っている時期であり、源氏自身の自惚れもあると言えよう。隠し通すことができたという結果から、「思ひやり少なき」に裏切りという重い意味は付与されていないと解することができる。

しかし、④と⑤は「恐ろしい」の対象は「罪」となっており、④は僧都から法話を聞いた時であり、⑤は「仏神」という語句が出て来ることから重い罪の意識である。密通当時の用例における「恐ろし」とは帝に対するものである。「罪」や「過ち」という意識は自己を冷静に見つめることができてこそ自分に対して持つ意識であるため、密通が生じた当時はそういう意識を持つことができず、一番に意識に上がることは帝への露見の恐れ、裏切りの意識である。④、⑤であらためて過去がとらえ直され、ようやく「罪」の意識を持つに至った。

こういう過去を持っている源氏が「いと恐ろしくあるまじき過ちなりけれ」というのは、過去との対峙によりはじめて自分の犯したことの「恐ろしい」「過ち」の重さを認識できたからである。ここには「思ひやり少なきほどの過ち」ではなく、故桐壺院に対する裏切りの「恐ろし」にとどまらず、世間に隠し通して不義の子を帝にし、自分は准太上天皇とまでなったこと

に対してもっと大きなものへの恐れ、王権侵犯による「恐ろし」が見られると言えよう。しかし一方では、用例②の「帝の御妻をも過つたぐひ、昔もありけれど、それは、また、いふ方異なり」と、昔の例をあげ、「帝の御妻をも過つたぐひ」は、源氏と藤壺の場合と同じである。このことから暗に自分の密通は柏木の場合とは異なつて情状酌量の余地はあると思つていたのである。自分は不義の子を帝にして王権を揺るがすようなことをしておきながら、それはあまりに虫がよい考え方である。故桐壺院のことを思い若いころよりは罪の重さを感じてはいるが、まだ不十分である。この点について長谷川政春氏は「光源氏は、妻女三宮の密通事件によって、まず自身の昔の密通事件（藤壺事件）の重さと恐れを確かめさせられ」と述べ、第一部では源氏の罪障感が希薄で自分の罪の大きさに十分気づいていなかったとされている<sup>4)</sup>。

確かに第一部ではそうであった。しかし、女三の宮の密通事件によって源氏は自らの過去に対峙したにもかかわらず、藤壺事件における罪の重さと恐れの確認はまだ不十分である。これは過去の密通という事実には対峙したが、故桐壺院の内心は別として表面上は隠し通し、両者の関係は維持されたという事実

に意識が引つ張られたゆえであろう。当時は恐れの中核をなすのは故桐壺院に対する裏切りへの恐れで、主体は自分であった。この時点では故桐壺院に対する裏切りへの恐れは「恐ろし」に集約され、「思ひやりなき」という意識はない。そのことから、「思ひやりなき」については、故桐壺院に密通の事実が発覚して故桐壺院が裏切りと認識するかということに意識が変わつてくる。

以上により、源氏の意識する「思ひやり」の有無の判断基準は、相手との信頼関係が維持されているかどうか、いいかえると相手が裏切られたと認識するかどうかということに関わることである。

### 結び

以上、「いと罪ゆるしがたけれ」の対象となる密通における「思ひやりなき」という言葉に注目して、源氏の藤壺事件における意識を再検討してきた。

従来の研究史においては注目されていなかった「思ひやりなき」という言葉を起点として、柏木の「思ひやりなき」から、源氏自身の過去の密通における「思ひやり」を逆照射すること

によつて、源氏の「思ひやりなき」は、加害者と被害者の関係性において、加害者自身が「裏切り」と意識することではなく、被害者が「裏切り」と意識することが「思ひやりなき」になるという、加害者目線の「思ひやりなき」であることが判明した。これは過去の密通という事実には対峙したが、父の内心は別として表面上は隠し通し、両者の関係は維持されたという自身の判断に意識が引つ張られて、父が裏切られたと意識しなければ「思ひやり」がないことにはならないという、自己にとつて都合の良い論理に引きずられてしまったからである。そこから、源氏の藤壺事件における自己の「罪」の大きさと重さの気づきはいまだ不十分であることがわかった。柏木の密通事件は〈応報〉という以上に源氏の認識の甘さを浮き彫りにするものだったと考えられる。

注

- (1) 清水好子氏「若菜上・下巻の主題と方法」『源氏物語の文体と方法』（東京大学出版会）一九八〇年六月（初出「源氏物語の主題と方法——若菜上・下巻について——」『源氏物語研究と資料——古代文学論叢第一輯』（武蔵野書院）一九六九年六月）
- (2) 重松信弘氏「源氏物語における女三宮事件の意義（二）——密通事件を中心として——」『国文学研究』第八巻（梅光学院大学）一九七二年一月
- (3) 今西祐一郎氏「因果応報」『源氏物語覚書』（岩波書店）一九八八年七月（初出「因果の諸相——源氏物語」岩波講座『日本文学と仏教』第二巻一九九四年一月）
- (4) 長谷川政春氏「光源氏の罪」『物語史の風景』（若草書房）一九九七年七月（初出「光源氏の罪」『東横国文学』第十三号一九八一年三月）
- (5) 今西祐一郎氏「罪意識の基底——源氏物語の密通をめぐって——」『国語と国文学』第五十巻 一九七三年五月（既出『源氏物語覚書』に補修）
- (6) 岡野道夫氏「源氏物語の罪について——特に柏木の場合をめぐって——」『語文』第三十三輯（日本大学国文学会）一九七〇年五月
- (7) 藤田加代氏「源氏物語における「おそろし」について——

光源氏造型と密着させながら——』『日本文学研究』第四十号（高知日本文学研究会）二〇〇三年三月

(8) 吉村研一氏「光源氏と柏木の密通における罪意識の語り分け——「おそろし」と「おほけなし」の果たした役割——」

『物語研究』第十一卷 二〇一一年三月

(9) 吉村研一氏が同右論文にて、源氏の「おそろし」について「単に人間桐壺帝に対する恐れを表現する「おそろし」では

ない。」「皇統という厳格で犯すことのできない規律に反する罪を恐れていると思われるのである」とされている。この根拠として「そらおそろし」の用例をあげておられるが、源氏については少なくとも須磨流論となる前はその用例はなく、既述のとおり賢木巻で藤壺に強引に迫っており、その時点でどこまで王権を犯すことの恐れをもっていたか疑問である。